富山大学教育学部研究論集　No.6：35－48（２００３）

地方霊場の立地環境と展開について

田上　善夫

Circumstances of Local Sacred Places and their Development in Japan

Yoshio TAGAMI

E-mail：*tagami@edu.toyama-u.ac.jp*

Abstract

There are many sacred places in Japan and pilgrimage people are visiting there. In this paper, the present conditions of some of these sacred places are surveyed, and their environment in the whole country and changes through the historical times are analyzed. Also, the influence of folklore and religion on them is estimated. The results are: 1) in the small-scale sacred places, stone statues are usually deified on the open air or in a small stone house. A form like a line or a circle can be seen on the network of those statues. 2) In the middle-scale ones, there are groups of areas for ascetics training such as waterfalls. 3) In the large-scale ones, the network is constructed with many unique and noted temples. 4) Each sacred point is often at the top or the bottom of the slope around the mountainous districts. And it often adjoins a shrine. 5) The pilgrimage way of a Goddess of Mercy sacred place has the form of a circle, and people walk with their faces turning to the circumference. The pilgrimage way of a Great Priest sacred place also has the form of a circle, but people walk with their faces turning to the center. On the other hand, sacred places along the road have the form of a straight line. 6) There are many Goddess of Mercy sacred places in Tohoku District, while there are many Great Priest sacred places in western Japan. Tohoku District has many basins where are suitable for the form of the Goddess of Mercy sacred place, while southwestern Japan has many islands which are suitable for the form of the Great Priest sacred place. 7) Goddess of Mercy sacred places were established mainly on the Middle Ages; Great Priest sacred places, on the Pre-Modern Ages; and other deities' sacred places, on recent days. Those sacred places have become more varied and larger. 8) Once, gods were deified at, or invited to, the sacred point. Afterwards, other deities were installed as a stone statue at the same point. These sacred points changed their characters and came to assume a Buddhistic one. 9) The Goddess of Mercy and other deities were usually deified in the temples of the Shingon sect. They were not denied by the Zen sect and were accepted when a Zen temple was constructed. As a result, there are many Shingon and Zen temples in the sacred places. 10) Today, pilgrimage season is not limited to spring or autumn; people visit sacred places throughout the year. Behind this may be a decrease in an agricultural population.

キーワード：　霊場，観音，大師，日本
Key words：　sacred place, goddess of mercy, great priest, Japan

Ⅰ　はじめに

近畿地方では西国巡礼，四国地方では四国遍路など，全国にさまざまな霊地を巡る風習がある。本論では神仏のまつられた霊地が結ばれたものを「霊場」とし，霊場にある札所を巡拝することを「巡礼」とする。類似の習俗は，地域や文化の違いを超えて普遍的にみられる。

霊場にゆかりある諸尊の名を冠する寺院は多数ある。「観音」寺は全国に，「薬師」寺は中央の近畿からやや遠い地に，「不動」寺や「地蔵」寺は，およそ中国・四国以外の地に分布が多い。しかし霊場に限ってそこにまつられる本尊からみると，観音は全国に，薬師は中央の近畿に，不動は中央から離れた周辺地域に，地蔵は特定の地域に集中する（田上善夫，2003）。このように，およそ諸尊名の寺院分布は全国的であるのに対して，霊場本尊の分布は地域的に偏り，両者の分布は同じではない。すなわち，この分布の相異は，個々の霊地というポイントと，霊場というそのネットワークの間の差に起因すると考えられる。

霊場の典型の一つ西国霊場などでは，本尊として観音がまつられる。同じく霊場の典型の一つである四国霊場などでは阿弥陀をはじめ，観音，薬師，不動，地蔵などがまつられる。また観音霊場では，札所寺院は禅系が主で真言系が次ぐ。大師霊場では，真言系が主であるが禅系や浄土系寺院も多い（田上善夫，2003）。すなわち西国霊場では，宗派はさまざまであるが観音が祀られていることが基本的に必要であり，一方四国霊場では本尊はさまざまであるが，真言系寺院であること

が基本的に必要である。観音や不動は，もともと滝や岩窟などに祀られることが多く，そこは修行の場でもあり，現世において身近な存在でもある。そのような場は各地に広く存在しても，霊場というネットワークになるときに，上記のようなさまざまな組織としての要因がかかわってくる。

ところで，これらの霊地から霊場というネットワークが全国各地に生まれたのはおよそ中世以降である。各地に西国霊場のような観音霊場が開創され，四国霊場のような弘法大師霊場も開創された。とりわけ近世には，小豆島，知多，篠栗（ささぐり）などのような写し霊場が全国各地に開創された。さらに現代においても全国各地にさまざまな霊場が開創されている。おそらく霊地の数は時代による変化は小さいが，霊場は時代により大きく変化している。

このように霊場が開創されることは，単一地点での参拝から，複数地点での巡拝という，より広域での能動的な行動への変化である。それには経済的・社会的な影響があることは無論であるが，背景に人々の自然や神仏への観念の変化があることを示している。本論では霊場の開創が意味するものの解明を目的とするが，霊場には千差万別のものがあるため，まず現地調査から現在の霊場の実態を把握し，次に全国の霊場について形態や立地の要因を分析し，さらに開創と展開について時代的背景より検討を行う。

Ⅱ　霊場の概観とその分析方法

1)　現在の主要霊場

全国にはさまざまな霊場があるが，塚田芳雄によれば新西国霊場は533，新四国霊場は357あるという（豊島和子，1995）。また地方により霊場に違いがあり，三十三ヶ所霊場は近畿より東が83に対し西は39しかなく，八十八ヶ所霊場は関東に多いが東北では少ない（表１）。

表１　霊場の地域性

	三十三ヶ所霊場	八十八ヶ所霊場
東北	17	1
関東	33	15
中部	33	9
近畿	24	2
中国	13	7
四国	7	4
九州	19	6
計	146	44

新城常三(1981)より集計

全国霊場巡拝事典（大法輪閣編，1997）や日本巡礼ガイドブック（大路直哉，2001）に収録されている霊場をまとめると，全国には観音霊場77，大師霊場37，不動霊場12，薬師霊場12，地蔵霊場８，十三仏霊場10など156の主要霊場がある。これらの霊場に属する寺院は，延べ6,891である（表２）。

2)　霊場の分析

各種の霊場も霊地としての寺院と，それらを札所として巡礼することにより成り立ち，これらの事例を第Ⅲ章で明らかにする。霊場には規模の大小，あるいは巡拝路の長短に，さまざまなものがある。こうした規模の違いは，霊場の性格，巡礼の形態，開創の由来等々にもつながると考えられる。徒歩での巡拝に要する時間から，日帰りで済む小規模霊場，宿泊を必要とする中規模霊場，長期休暇ないしは休職を要する大規模霊場，などの規模に分けてみることができる。これらの時間は巡礼に赴く準備や目的が異なると考えられるために，各規模の若干の事例から現在の霊場の実態を明らかにする。なお寺院の境内などに箱庭のように，三十三ないし八十八の石仏がまつられるが，それぞれが連続的であるため，霊場の対象に含めないことにする。また中世より代表的な霊場の中から坂東と秩父，近世以降に盛んになった霊場の中から篠栗と知多を，事例として含めた。

次に全国百数十ヶ所の霊場を分析することにより，統計的にみた霊場の特色を，第Ⅳ章で明らかにする。まず霊場を構成するポイントとしての霊地・札所の立地環境について，とくにその地形を傾斜と斜面上の位置について分析する。霊場はこれらの霊地がネットワーク化されたものであり，巡礼路の空間的形態には，その潜在的な性格が反映されている。またこれらの霊場は特定の地域内においても複合的に存在しており，こうした全国分布には，霊場間の相互関係が示される。最後にそれらの時間的な変動，とくに霊場の種類と開創の年代などについて分析する。

とくに地域内に霊場が複合的に存在するようすには，国内でも地方ごとに差異があり，時代的にも顕著に変化がみられる。霊場とその巡礼には，まつられるものや巡拝のありかたなどに，民間信仰あるいは習俗としての性格が含まれている。そのため霊場は多様な性格をもち仏教そのものとはやや異なるが，霊場を構成するものは基本的に寺院であり，その開創や展開は，当時の仏教のありかたと深くかかわっている。そのため第Ⅴ章では，霊場と仏教のかかわりについて，仏教の時代的変遷にもとづいて検討を行う。

Ⅲ　霊場の規模別分類とそれぞれの特色

1)　小規模な観音・大師霊場

倶利伽羅峠三十三観音

旧北陸道の倶利伽羅峠をはさんで，石川県河北郡津幡町竹橋から，富山県小矢部市石坂の間に，倶利伽羅峠三十三観音がある（図１）。倶利伽羅峠三十三観音は，倶利伽羅長楽寺の秀雅上人により，慶長年間に設置されたと伝えられる。ただし残された石像が寄進されたのは，嘉永年間（1848-1853）である。現在第1番は津幡町倉見の専修庵にあり，第33番は小矢部市埴生（はにゅう）の医王院にある（図２）。医王院は南西から北東に伸びる小丘陵の突端部付近の若宮古墳という６世紀初頭に作られた全長50m の前方後円墳の前に建つ。浄土宗に改宗され以前は真言宗で，薬師如来を本尊とするほかに僧形八幡，阿弥陀如来，閻魔大王，11体の観音，地蔵などをまつる。

観音像は現在も33体残されていることが確認されている（久世嘉太郎，1998）。現在の位置は特定箇所に集中しており，順番としてもやや不自然である。これがその後の大きな移動によるものであり，本来は旧北陸道に沿って置かれていたのならば，庄川町－砺波市の中筋往来や福光町－金沢市の殿様道に沿った三十三観音と同様に，街道沿いにまつられた霊場ということになる。

表2　主要霊場一覧

●西国（観音）霊場，　四国（八十八ヶ所）霊場，●不動霊場，⁂薬師霊場，ᵔᵔ地蔵霊場，○十三仏霊場

位置	種類	霊場名	寺院総数	総延長	開創年代	最多宗派	最多本尊
北海道	●	北海道三十三観音霊場	33	2115	近代	真言	観音
北海道	●	北海道三十六不動尊霊場	36	1668	現代	真言	／
東北	●	奥州三十三観音霊場	33	825	中世	禅	観音
東北	●	津軽三十三観音霊場	33	323	近世	他	観音
東北	●	秋田三十三観音霊場	33	834	中世	禅	／
東北	●	最上三十三観音霊場	34	230	中世	天台	観音
東北	●	置賜三十三観音霊場	33	446	／	真言	観音
東北	●	庄内三十三観音霊場	35	387	／	禅	観音
東北	●	会津三十三観音霊場	34	118	近世	禅	観音
東北	●	会津ころり三観音霊場	3	26	／	／	観音
東北	●	信達三十三観音霊場	33	110	近世	禅	観音
東北	●	東北三十六不動尊霊場	36	1225	現代	真言	／
東北	●	会津五色不動尊霊場	5	104	現代	真言	／
東北		山形百八地蔵尊霊場	108	457	現代	／	／
東北	○	山形十三仏霊場	13	372	現代	禅	阿弥陀
関東	●	坂東三十三観音霊場	33	899	中世	真言	観音
関東	●	秩父三十四観音霊場	34	62	中世	禅	観音
関東	●	那須三十三観音霊場	33	160	近世	真言	観音
関東	●	下野三十三観音霊場	33	222	／	真言	観音
関東	●	高崎観音六観音霊場	6	0	／	真言	観音
関東	●	狭山三十三観音霊場	33	26	／	／	観音
関東	●	児玉三十三霊場	33	70	現代	真言	阿弥陀
関東	●	行徳三十三観音霊場	34	31	／	浄土	観音
関東	●	安房三十四観音霊場	34	162	中世	真言	観音
関東	●	新上総国三十三観音霊場	33	259	／	真言	観音
関東	●	昭和新撰江戸三十三観音霊場	34	91	現代	浄土	観音
関東	●	武蔵野三十三観音霊場	34	88	近代	真言	観音
関東	●	鎌倉三十三観音霊場	33	19	近代	浄土	観音
関東	●	旧小机領三十三所観音霊場	33	83	／	真言	観音
関東	●	津久井観音霊場	43	122	近世	禅	観音
関東	●	三浦三十三観音霊場	33	68	／	禅	観音
関東	●	新上州三十三観音	34	308	現代	真言	／
関東		相馬霊場八十八ヶ所	89	162	／	／	／
関東		関東八十八ヶ所霊場	88	2413	現代	真言	阿弥陀
関東		埼東八十八ヶ所霊場	88	105	近世	／	不動
関東		印西大師講	89	540	／	／	／
関東		御府内八十八ヶ所霊場	90	679	近世	真言	阿弥陀
関東		多摩八十八ヶ所霊場	87	226	近世	真言	不動
関東		奥多摩新四国八十八ヶ所霊場	91	825	近世	真言	阿弥陀
関東		玉川八十八ヶ所霊場	88	197	近代	真言	阿弥陀
関東	●	北関東三十六不動尊霊場	36	586	現代	真言	／
関東	●	関東三十六不動尊霊場	36	622	現代	真言	／
関東	●	五色（東都五眼）不動尊	6	37	／	天台	／
関東	●	武相不動尊霊場	28	184	現代	真言	／
関東	⁂	武相寅歳薬師如来霊場	25	52	近世	禅	／
関東	⁂	武南十二薬師霊場	12	20	近世	真言	／
関東		江戸六地蔵	6	37	近世	／	／
関東		鎌倉二十四地蔵霊場	24	45	／	禅	／
関東	○	秩父十三仏霊場	13	115	／	禅	阿弥陀
関東	○	鎌倉十三仏霊場	13	17	現代	禅	阿弥陀
北陸	●	北陸三十三観音霊場	34	519	現代	真言	観音
北陸	●	越後三十三観音霊場	33	446	中世	真言	観音
北陸	●	佐渡西国三十三観音霊場	37	218	現代	／	観音
北陸	●	能登国三十三観音霊場	34	182	近世	／	観音
北陸	●	若狭三十三観音霊場	34	138	現代	禅	観音
北陸		弘法大師越後廿一ヶ所霊場	21	197	近代	真言	阿弥陀
北陸		佐渡新四国八十八ヶ所霊場	90	359	近世	真言	阿弥陀
北陸	●	北陸不動尊霊場	38	641	現代	真言	／
東海	●	信濃三十三観音霊場	35	957	近世	禅	観音
東海	●	甲斐国三十三観音霊場	33	384	中世	禅	観音
東海	●	恵那三十三観音霊場	36	137	近世	禅	観音
東海	●	美濃三十三観音霊場	34	208	近世	禅	観音
東海	●	飛騨三十三観音霊場	43	224	／	禅	観音
東海	●	益田三十三観音霊場	33	99	／	／	／
東海	●	伊豆横道三十三観音霊場	33	92	中世	禅	観音
東海	●	遠州三十三観音霊場	33	201	現代	禅	観音
東海	●	駿河三十三観音霊場	34	222	／	禅	観音
東海	●	遠江三十三観音霊場	33	111	／	禅	／
東海	●	尾張三十三観音霊場	33	227	近世	禅	観音
東海	●	三河三十三観音霊場	37	81	現代	浄土	／
東海	●	南知多三十三観音霊場	37	42	近代	禅	観音
東海	●	伊勢西国三十三観音霊場	41	532	中世	真言	観音
東海	●	東海白寿三十三観音霊場	34	563	現代	禅	阿弥陀
東海		甲斐百八ヶ所霊場	109	418	近世	禅	阿弥陀
東海		諏訪八十八番霊場	89	168	／	／	／
東海		美濃新四国八十八ヶ所霊場	88	604	近世	禅	観音
東海		伊豆八十八ヶ所霊場	88	277	近代	禅	阿弥陀
東海		知多新四国八十八ヶ所霊場	98	239	近世	禅	阿弥陀
東海		三河新四国霊場	90	162	近世	浄土	阿弥陀
東海	ᵔᵔ	三重四国八十八ヶ所霊場	93	410	現代	真言	観音
東海	●	東海三十六不動尊霊場	36	622	現代	真言	／
東海	●	三河三不動霊場	3	51	現代	真言	／
東海	⁂	遠江四十九薬師霊場	50	119	近世	禅	／
東海	⁂	中部四十九薬師霊場	51	705	現代	禅	／
東海	⁂	東海四十九薬師霊場	54	807	現代	禅	／
近畿	●	西国三十三観音霊場	36	682	中世	真言	観音
近畿	●	新西国三十三観音霊場	38	703	近代	真言	観音
近畿	●	近江三十三観音霊場	33	287	近世	天台	観音
近畿	●	綾部三十三観音霊場	39	147	中世	禅	観音
近畿	●	洛西三十三観音霊場	36	42	中世	浄土	観音
近畿	●	丹波国三十三観音霊場	37	283	近世	禅	観音
近畿	●	天田郡三十三観音霊場	34	187	／	禅	観音
近畿	●	河内西国三十三観音霊場	38	199	／	浄土	観音
近畿	●	大阪三十三観音霊場	33	24	／	／	／
近畿	●	明石西国三十三観音霊場	33	77	／	天台	／
近畿	●	淡路西国三十三観音霊場	33	141	中世	真言	観音
近畿	●	和歌山西国三十三観音霊場	36	57	／	浄土	観音
近畿	●	播磨西国三十三観音	34	295	近世	真言	／
近畿		摂津国八十八ヶ所霊場	88	222	近世	真言	観音
近畿		大和新四国八十八ヶ所霊場	103	240	近世	真言	阿弥陀
近畿		淡路四国八十八ヶ所霊場	103	233	近世	真言	阿弥陀
近畿		伊賀四国八十八ヶ所	90	387	近世	真言	／
近畿	●	近畿三十六不動尊霊場	36	587	現代	真言	／
近畿	⁂	西国薬師霊場	49	953	現代	真言	／
近畿	⁂	播州薬師霊場	21	215	現代	天台	／
近畿	⁂	淡路四十九薬師霊場	50	185	中世	真言	／
近畿		京都六地蔵めぐり	6	24	中世	／	／
近畿		河泉二十四地蔵霊場	24	79	中世	真言	／
近畿		神戸六地蔵霊場	7	34	現代	真言	／
近畿		但馬六十六地蔵霊場	70	415	／	／	／
近畿	○	京都十三仏霊場	13	391	現代	真言	阿弥陀
近畿	○	おおさか十三仏霊場	13	68	現代	真言	阿弥陀
近畿	○	淡路島十三仏霊場	13	93	現代	真言	阿弥陀
近畿	○	大和十三仏霊場	13	174	現代	真言	阿弥陀
近畿	○	紀伊国十三仏霊場	21	404	／	真言	阿弥陀
中国	●	中国観音霊場	37	883	現代	真言	観音
中国	●	瀬戸内三十三観音霊場	33	369	現代	真言	観音
中国	●	伯耆三十三観音霊場	33	188	近世	禅	観音
中国	●	因幡三十三観音霊場	34	214	近世	禅	観音
中国	●	松江三十三観音霊場	33	75	／	禅	／
中国	●	出雲三十三観音霊場	34	188	中世	禅	観音
中国	●	石見曼荼羅観音霊場	46	316	／	真言	／
中国	●	長門三十三観音霊場	33	319	／	禅	観音
中国	●	周防三十三観音霊場	33	151	／	禅	観音
中国	ᵔᵔ	高野山真言宗美作八十八ヶ所霊場	88	365	現代	真言	観音
中国		広島新四国八十八ヶ所霊場	89	499	近世	真言	阿弥陀
中国		児島四国八十八ヶ所霊場	88	244	近世	真言	観音
中国		神島八十八ヶ所霊場	88	9	近世	／	観音
中国	ᵔᵔ	因島八十八ヶ所霊場	97	32	近代	／	観音
中国		周防大島八十八ヶ所霊場	88	191	近代	浄土	阿弥陀
中国	⁂	因幡薬師霊場	30	274	現代	禅	／
中国	⁂	出雲十大薬師霊場	10	41	／	禅	／
中国	⁂	中国四十九薬師	49	1143	現代	禅	／
中国		松江六地蔵	6	9	／	／	／
中国	○	出雲国十三仏霊場	13	94	現代	真言	阿弥陀
四国	●	阿波西国三十三観音霊場	33	389	／	真言	観音
四国	●	讃岐三十三観音霊場	34	241	中世	真言	観音
四国	●	伊予道前道後十観音霊場	10	192	／	真言	観音
四国		四国八十八ヶ所霊場	106	873	中世	真言	観音
四国	ᵔᵔ	四国別格二十霊場	20	500	現代	真言	地蔵
四国		新四国曼荼羅霊場	88	891	現代	真言	阿弥陀
四国	ᵔᵔ	にいはま新四国八十八ヶ所霊場	88	123	／	／	地蔵
四国		小豆島八十八ヶ所霊場	94	110	近世	真言	阿弥陀
四国		伊予大島八十八ヶ所霊場	88	60	近世	／	観音
四国	●	四国三十六不動霊場	36	543	現代	真言	／
四国	⁂	伊予十二薬師霊場	12	75	現代	真言	／
四国	○	伊予十三佛霊場	15	124	／	真言	阿弥陀
九州	●	九州西国三十三観音霊場	33	693	中世	天台	観音
九州	●	国東三十三観音霊場	34	168	／	天台	／
九州	●	相良三十三観音霊場	34	149	中世	／	観音
九州	●	山鹿三十三観音霊場	33	48	／	／	観音
九州	ᵔᵔ	篠栗八十八ヶ所霊場	89	185	近世	真言	観音
九州	ᵔᵔ	壱岐四国八十八ヶ所霊場	89	109	近代	禅	阿弥陀
九州		九州八十八ヶ所霊場	93	1619	現代	真言	不動
九州	●	九州三十六不動霊場	36	958	現代	真言	／
九州		九州二十四地蔵尊霊場	24	361	現代	真言	／

なお小矢部から北東に離れた高岡市柴野の守善寺にも，石造のやや大きな千手観音がまつられている。街道沿いではなく山間に入るため，本来の位置を示しているのか不明である。これには十六番山城国清水寺の名と天文二十一（1552）の造立年が刻まれる（京田良志，1976）。また氷見の上日寺にも戦国末の三十三観音がある。倶利伽羅峠とこれらの時代は大きく隔たるが，なお先行する観音像が存在した可能性も残される。

篠島の山弘法様

愛知県知多郡南知多町篠島は，知多半島南端の師崎から３kmの沖合にある，南北約２kmの小島である。篠島は古くは伊勢神宮領であり，現在も毎年神宮に御幣鯛を奉納するといい，伊勢とのつながりの深いところである。島の中央には神明社が鎮座するが，神社の禰宜は現在は島を離れて東京にいるという。

篠島の中にはさらに小さな八十八ヶ所がある。この八十八ヶ所は，島の弘法さんあるいは山弘法様ともいわれる（図３）。いつごろからのものかは不明という。島の古老の子供のころには，旧三月二十一日にみなでまわり，巻いたおすしを島の南部の中学校のあたりで食べたという。この八十八ヶ所は，昭和30年代より，島内の松寿院，正法寺，医徳院，西方寺の４寺院で22ヶ所づつ管理，修理がされるようになった。島の小学校付近では，上の山道から20mほど下の道に降ろした（図４）。

なお３月20，21日を弘法様とよんで，弁当・酒をもって八十八ヶ所詣りをすることが紹介されている（篠島観光協会，1983）。またそれらの10体ほどが，「地蔵」として紹介されている（中根富三郎，2001）。こうした巡拝には宿泊を要しないが，その対象は寺院ではなく露天にまつられたり，また高さ1m内外の石龕におさめられた石像であることが多い。

2）　中規模の霊場と札所の特色

篠栗八十八ヶ所

福岡市の東南にある篠栗霊場は，小豆島，知多とならぶ著名な新四国霊場である。札所番号順に巡礼路延長を求めると185kmにもなるが，札所の配置が不規則なためで，篠栗は全体が比較的狭い盆地の中に集中している（図５）。

現在の篠栗は，JR篠栗線と201号が通過し交通量が多い。篠栗駅から始めて戻る巡回コースが示されており，JR城戸駅前の北側には３番城戸釈迦堂，31番城戸文殊堂，45番城戸ノ滝不動堂，１番南蔵院，71番城戸千手観音堂，60番神変寺がある。谷底からの坂道の下部に納骨堂があり，たくさん並んだボックスは，扉を開くと位牌がありさらに骨壷がある。南蔵院は岩と水の渓谷を回遊するように作られ，原色に塗られた不動，小さいが精緻な羅漢像などが立ち並び，巨大な涅槃像の体内には八十八ヶ所の砂がおさめられる。

若杉山北向斜面には，30番田ノ浦翡玉堂，７番田ノ浦阿弥陀堂，65番三角寺，83番千手院，63番天狗岩山吉祥寺，75番善通寺など，いずれも樹叢と水と岩を含んだ多くの札所がある。斜面上部の荒田高原に，多くの宿泊施設がある。荒田の善通寺は南蔵院との係争のあとが消えず，多くの立看板や紛争の経緯を詳しく記した配布資料が置かれる。

北向斜面やや西側には，46番岡部薬師堂，68番岡部神恵院，10番切幡寺，９番山王釈迦堂，39番延命寺がある。荒田の旅館街の下方に赤い建物の切幡寺があり（図６），水子供養の地蔵，岩，木，滝が脇にあるが，冬季には訪れる人も多くない。

この篠栗八十八ヶ所は天保六（1835）年に発願され，その後に札所本尊の安置が進められて，安政二（1855）年に完成した。廃仏毀釈で仏堂が破壊されたが，明治12年には仏堂を近くの寺院に所属させる形で保護し，さらに明治32年には高野山から南蔵院を迎え入れた（野見山覚応，2002）。安政期には守堂者は農家であったが，現在も旅館や食堂の主人であることが多い。現在は21寺があるが，住職がいるのは南蔵院と遍照院のみである。札所の番号は，仏像完成順や願主の札所番号の選択による（豊島和子，1995）。そのため札所番号はきわめて乱雑に配置されており，順路や位置関係を示すものではない。また現在では堂内に入ってお参りをするが大多数は住職がおらず，大型化した建物も寺院とはやや様相が異なる。篠栗霊場は本来由緒ある寺院を巡ることに始まるわけではない。

篠栗の各札所の顕著な特色は，その傍らに斜面を流れ落ちる渓流やさらに滝が配されることである。篠栗はもともと英彦山－福知山－野美山（呑山）－若杉山－三郡山－宝満山の回峰行ルート中に位置し，石井坊（石泉寺）という竈門山派修験道場もあって，半僧半俗の修行者が水垢離をしたという（豊島和子，1996）。すなわち篠栗のほぼ全域が修行の場であり，それを起源とする霊場は仏教的な装いをとるにせよ，不動をはじめさまざまな仏像が並んでまつられる。八十八ヶ所は四国の大師霊場にもとづくものであるが，そのミニュチュアというには性格が大きく異なるようである

秩父三十四観音

埼玉県西部にある秩父34札所は，関東平野が広がり盆地の少ない関東地方にあって，最大の盆地である秩父盆地にある（図７）。秩父霊場は，巡礼路は直線距離で計62kmになり，全て巡るにはいずれにしても宿泊しなければならない。秩父付近の荒川の谷口集落である寄居には武州寄居十二支霊場があり，奥武蔵の山地を越えた東方には武蔵越生七福神などがあるなど，さまざまな霊場が付近にある。

秩父三十四観音の巡路は，秩父市街東方の横瀬川沿いに，北から南へと武甲山に向けて始まる。第五番小川山語歌堂は，近くの臨済宗南禅寺派の長興寺が管理し，准胝観音がまつられる。朱塗りの堂で一夜旅の僧と歌を語ったという。丘陵の麓に沿ってそばなどの観光客向けの食堂が点在し，また新しい住宅も多く，郊外住宅地のようである。段丘面の傾斜がきつく，棚田状となっている。第六番向陽山卜雲寺は曹洞宗で，谷の少し奥まったところにあり，下の斜面はぶどう畑である。本堂は観音にちなみ円通殿といい，境内には武甲山を背にして六地蔵がたち，稲荷大明神も祀られる（図８）。第七番青苔山法長寺は曹洞宗で横瀬側の段丘上にある。その牛伏堂はかつて段丘崖下の根古屋にあり，十一面観音をまつる観音堂も別棟にあった。段丘下に深く刻まれた谷をはさみ対岸の南側の段丘上には，武甲山御嶽神社がある。そのやや上方に臨済

図1　倶利伽羅峠三十三観音の現位置

石川県河北郡津幡町竹橋から富山県小矢部市石坂の旧北陸道（黒線）に沿って，文政年間(1818-1830)あるいは嘉永年間(1848-1853)に安置されたといわれる。なお本図他は ArcMap8.1 および，カシミール 3D7.73 により作成。

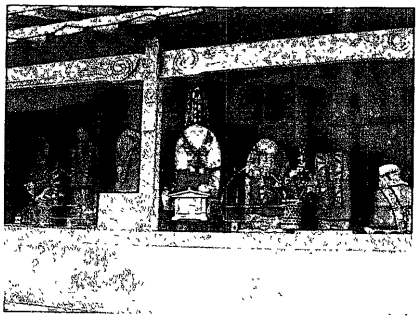


図2　倶利伽羅峠の第 18, 20, 30, 32 番観音

倶利伽羅峠は北陸道の要所である。同地の長楽寺が神仏分離により廃されて手向神社が残ったが，その後再建された不動寺の境内に安置される。

図4　篠島第 19 番

篠島北東部の 1-22 番では，石仏に衣が着せられ，花などが供えられている。この 19 番には松寿寺観音参拝者の銘がある。

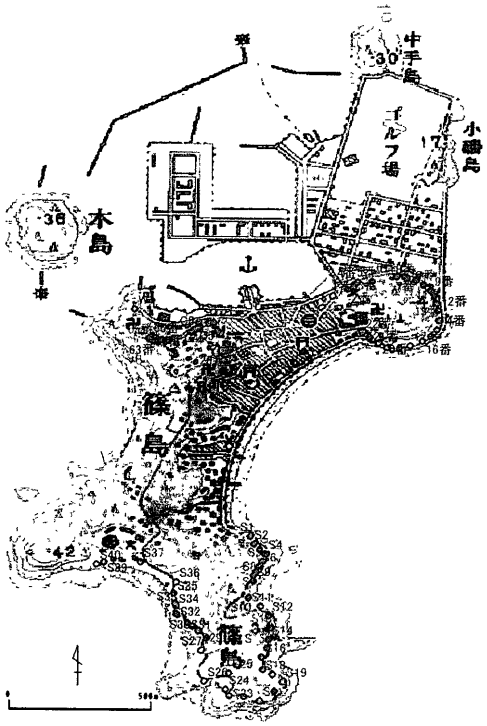


図3　篠島の島弘法

愛知県知多郡南知多町の知多半島南端の海上にあり，島内の小丘を囲むように安置される。北東部，南部，北西部に集中する。

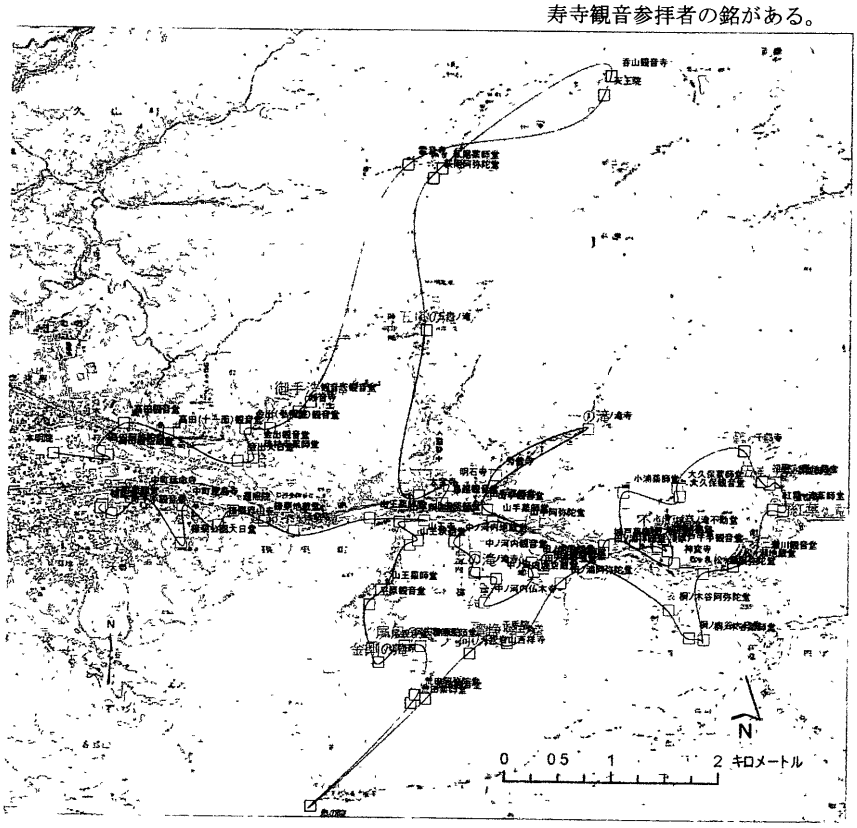


図6　篠栗八十八ヶ所霊場

福岡県糟屋郡篠栗町にあり，小豆島，知多とならぶ有数の地方霊場である。南北の斜面に刻まれた谷に沿って，多くの札所がある。巡拝の順序(赤線)は篠栗町役場による。

図5　篠栗霊場第 10 番切幡寺

北向斜面にある渓流に隣接し，境内には地蔵，不動をはじめさまざまな石像が安置される。

図 8　秩父霊場第 6 番ト雲寺

横瀬川右岸の小丘中腹にあり，境内からは正面に武甲山が一望される。地蔵なども安置されている。

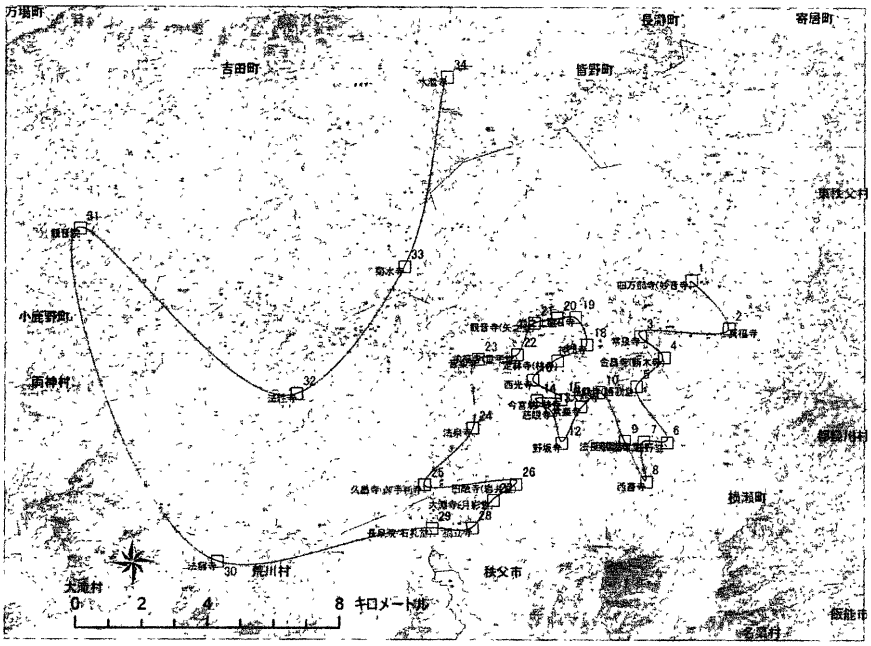


図 7　秩父三十四観音霊場

埼玉県秩父市，秩父郡横瀬町，荒川村，小鹿野町，吉田町，皆野町の秩父盆地全域にわたる。とくに武甲山の山麓には第 1 番から 29 番までが集中する。

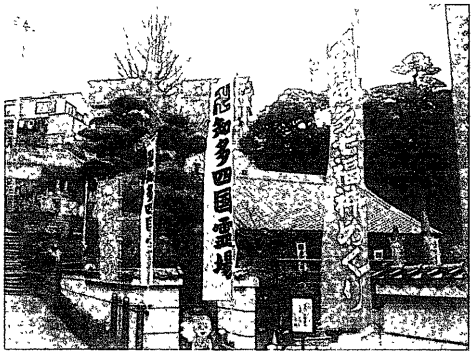


図 10　知多四国霊場第 38 番正法寺

38 番と 39 番は愛知県知多郡南知多町の篠島に，37 番は同日間賀島にある。

図 11　坂東三十三観音霊場第 2 番岩殿寺

神奈川県逗子市にあり，海岸からは 1km 余りである。南方に向かって谷が開ける。

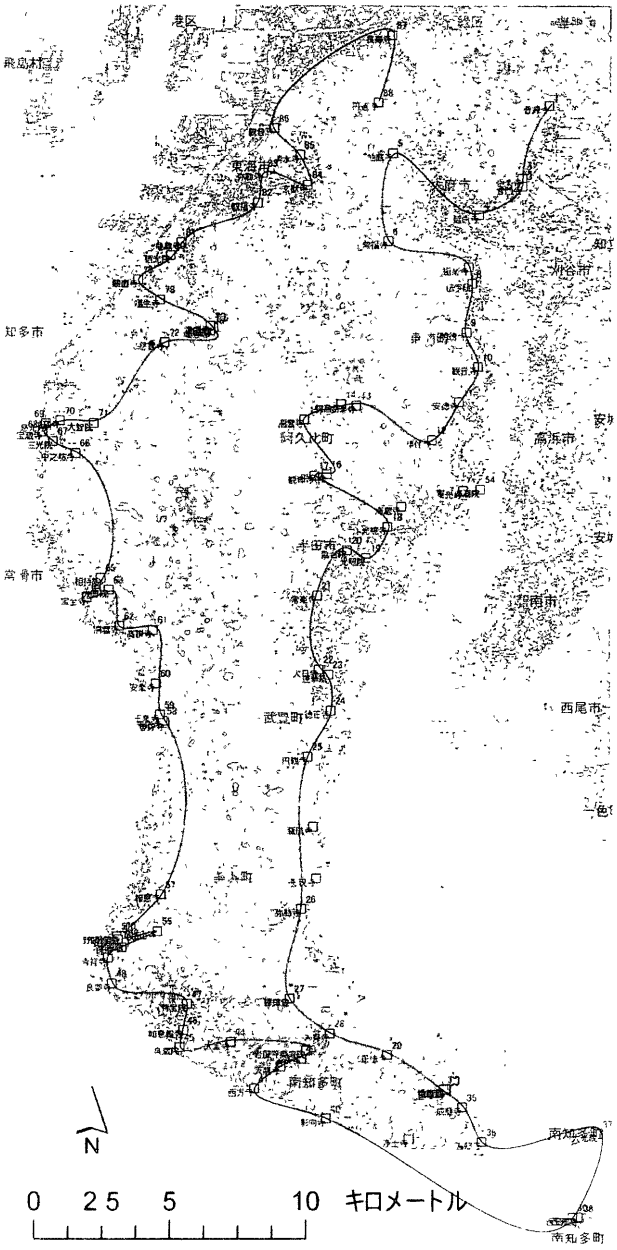


図 9　知多四国八十八ヶ所霊場

知多半島の東岸を南下して西岸を北上し，愛知県豊明市，大府市，知多郡，半田市，常滑市，知多市，東海市，名古屋市にわたる。多くが山麓に位置している。

宗南禅寺派の第八番清泰山西善寺があり，境内は庭園となっている。第九番明星山明智寺は臨済宗南禅寺派で，本尊は如意輪観世音であり，また境内には安産・子育ての観音がある。

横瀬川－荒川間の丘陵の東面，斜面のやや上方にある第十番万松山大慈寺は曹洞宗である。本尊の聖観音のほか，子育観音や地蔵菩薩がまつられる。裏手の丘陵上にはふるさと歩道が設けられている。丘陵の北側は急崖で，南側は緩斜面でシュロなどを含む山林となり，盆地内の穏やかな気候を示している。第十一番南石山常楽寺は，南西向斜面の墓地の上にあり，市街が展望される。明治初年までは天台宗の寺であったが曹洞宗に変わった。本尊は十一面観音だが釈迦如来も祀られ，寺より上方に稲荷があって参道入口から木の鳥居が続く。

秩父市街にある第十三番旗下山滋眼寺は曹洞宗である。堂内に多数の経が納められ，花山法皇らの像が並ぶ。本尊の聖観音のほか薬師如来がまつられ「あめ薬師」といわれて眼病平癒に功徳があり，7月8日の縁日ではブッキリ飴が売られ，さらに境内に稲荷大明神がまつられる。秩父では巡拝時の「納札」の習慣が衰退したといわれるが，建物への貼付禁止が明示されている。秩父鉄道の東側の段丘面上には第十五番母巣山少林寺がある。臨済宗建長寺派で本尊は十一面観音である。明治維新の際に他の寺から受け継いだ。巡拝者は2月ころは少ないという。

この秩父霊場は16世紀初期に34ヶ所になり，西国・坂東と合わせて百観音になることで地方性を脱却し，さらに江戸からの巡礼者を吸収したという（佐藤久光，1993）。霊場として最も有名なものの一つであり，規模は西国霊場や四国霊場，また坂東霊場にくらべてひと桁小さいが，古くから続く霊場の典型とみることができる。各札所寺院はそれなりの規模であるが，いずれもが地方の名刹というわけではない。一方墓地なども併設され，札所である以前に禅系寺院であり，篠栗のような修行場ではない。その特色をみれば，段丘面端や丘陵斜面のような展望のよい地に位置している。さらにその展望は秩父盆地で圧倒的な存在である武甲山に向けられており，秩父霊場が武甲山にもとづいて統一された霊場であることを示している。

知多四国八十八ヶ所

愛知県の知多半島には，半島を右回りに周回する知多四国八十八ヶ所霊場が続く（図９）。さらに知多半島の先端からは船で海を渡って知多郡南知多町篠島に至り，札所間を結ぶ距離は延べ239km に達する。篠島の中央部にある第38番正法禅寺は曹洞宗の寺院で，その裏手に島の大きな墓地がある。春には日に500人もの巡拝客があるという（図10）。島内はわずかな緩斜面に住宅や観光旅館などが密集するが，正法禅寺に隣り合わせるように番外の西方寺という浄土宗寺院がある。近くの斜面下部には湧水の池があり，後村上天皇が使われたという伝承から帝井とよばれる。篠島にはさらに第39番医徳院があり，真言宗豊山派の寺院である。なお，篠島には知多四国霊場のほかに，南知多三十三観音の番外札所である曹洞宗の松寿寺がある。

正法禅寺は正平二（1347）年，医徳院は建暦二（1212）年に移転再興，松寿寺は天文十一（1542）年の開基と伝えられる（南知多三十三観音霊場会，1982）。いずれにしても知多霊場の開創以前からの古い歴史があるが，島にはこれらの他には寺院がない。またこれらの諸寺は島の中央部の小高い位置を占める。半島部にある札所寺院も，半島脊稜の丘陵の麓や小谷の奥部に位置するものが多い。すなわち地形的に特色のあるところの寺院が結ばれていることがわかる。

上記のように篠島には多くの札所寺院が密集して船で訪れる巡礼者も多く，巡礼は身近である。島の人達は地元に霊場があっても，また島外の異なる霊場に巡礼に出かける。ある高齢の女性は，40歳代から巡礼に出かけるようになり，知多四国霊場を10回まわったほか，本四国，淡路，小豆島，西国，坂東，秩父の各霊場などにも行ったという。季節は大体春で，西国霊場のように大きな霊場は，10日くらいずつに分けてまわるという。いずれもツアーが組まれてバスなどでまわるといい，これらは現代の巡礼の，一つのパターンを示しているようである。

3)　大規模霊場と札所寺院

坂東三十三観音

坂東三十三観音は，西国霊場に次ぐかあるいは同時代からの古い歴史がある。鎌倉からはじまり関東平野をめぐり，札所を直線で結んでも総延長は899km に達する。

第1番大蔵山杉本寺は天台宗で，杉本観音ともよばれる。湘南アルプスの南麓のやや急な斜面上にある。寄せ棟の茅葺き屋根の本堂に，十一面観音のほか多くの仏像が祀られる。境内の洞窟の奥には大蔵弁財天が祀られ，熊野大権現や白山大権現も祀られる。杉本観音から東方の新たに住宅地が開発された丘陵をはさみ，逗子の海岸から内陸側の谷の奥部上方に，第2番海雲山岩殿寺がある。南に海を見渡せるので以前は海前山といい，岩窟が殿堂のようであったので岩殿といわれる。曹洞宗で，境内には熊野権現社のほか，蛇蔵，猿田彦神社，稲荷明神社がある（図11）。鎌倉の海岸付近に後に崖を控えて第３番祇園山安養院田代寺がある。浄土宗で本尊は阿弥陀如来であるが，田代観音ともいわれる。境内に夫婦，御助，親子地蔵がある。納経の時期は，３～５，９～10月が多く，日曜は車で動けないためバスでくる人が多いという。周辺には寺院が多く，近くに癌封じの寺や，厄除祖師，鬼子母神・薬師堂，千手観音・不動尊堂などがある。若宮大路の西方，大仏の海側の高い斜面の上部に第４番海光山長谷寺がある。海と鎌倉の街が一望される。現在の大伽藍とは異なり，旧本堂はシンプルな寄棟の茅葺き屋根であった。浄土宗で境内に稲荷大明神や洞窟などがある。

これらの寺院は，多くは急斜面を上がった最上部付近に位置している。市街地のはずれにあたり，規模には大小があるが，周辺の他の多くの寺院に比べてより規模が大きい。地元の中心的な寺院であるだけでなく，とくに長谷寺などは全国的にも知られる名刹である。坂東霊場の規模は西国霊場や四国霊場とならんで大きく，徒歩での巡礼には月余を要するが，三十三の札所寺院は開創当時においても特徴的な寺院であっ

たと考えられる。

Ⅳ　霊地，霊場，霊場群立地の諸要因およびその時代的変遷

1)　札所寺院と周辺地域の地形の特色

神社や寺院は参道に高い石段があるなど，社寺は高所に建立される傾向がある。寺院はその名称の前に山号をもつことも，山地地形とのかかわりを示している。全国の34,353神社，43,947寺院について，境内周辺の約250m四方の土地について，傾斜や位置を調べる。ゼンリンの電子地図帳より寺社の位置を得，国土地理院の数値地図50mメッシュより，それぞれの寺社周辺の５×５メッシュ，約250m四方の高度を得て，傾斜および位置を３区分した。

その結果，神社は寺院にくらべて急傾斜地に立地することが多いことが示される。ただし，著名な神社や寺院により異なる傾向がみられる。とくに金比羅，熊野，白山，日吉社などは急傾斜地に多く，一方稲荷，八坂，住吉，神明社などは平坦地に多い。反対に寺院は神社にくらべて平坦地に立地するものが多いが，急傾斜地のものも多い。とくに不動，観音は急傾斜地に位置するものが多い。観音などは岩壁への懸造りなども多いことが関係する。一方薬師は都市的性格が顕著である（図12）。観音は霊場の中で最も重要な本尊であり，またそれに次ぐ不動と併せて，以下主要な分析対象とする。

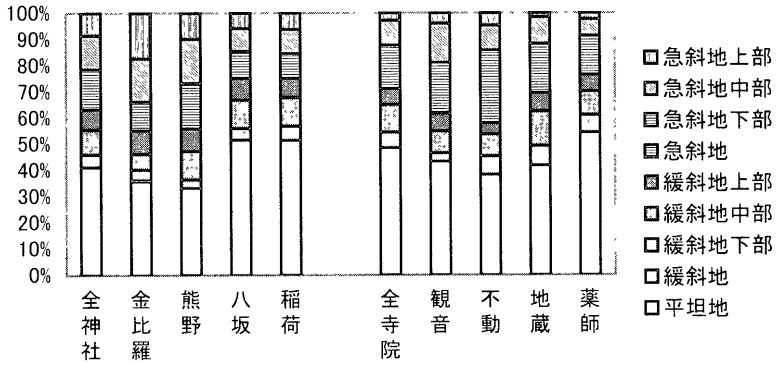


図12　神社，寺院と地形

傾斜地が自然的性格あるいは山岳信仰的性格を示し，平坦地が都市的性格を示すとみなせば，神社にせよ，寺院にせよ，異なる性格をもつものに分かれることがわかる。とくに寺院とよばれるものの中にも，自然的性格が濃厚なものがある。

たとえば西国観音霊場において古くは第1番であった長谷寺は，山号を豊山といい，院号はこもりくにもとづく隠国より転じた神楽院という。２km上流左岸の滝蔵山に滝蔵権現が祀られ，宝塔の落ちたところは落神といって雷神加茂大明神を祀るという（川田聖見，1980）。奈良盆地から東に入って山間部にさしかかり，奈良の諸大寺とは趣を異にする。

観音霊場ではさらに山岳との結びつきが顕著である。例えば天正年間（1573-92）以降の開創と考えられる，秋田あるいは出羽国六郡三十三観音では，第1番塩湯彦神社，第６番吉祥院，第15番黒尊仏，第21番太平山元正寺，第27番赤神山光飯寺などは，熊野信仰や修験とのかかわりが深いといわれる（高橋富美雄，2002）。

大師霊場も四国八十八ヶ所の場合，「山」にあるもの65で，そのうち頂上や中腹には33，山の付近には32がある（田中 博，1983）といわれ，山との結びつきが深い。そのほかにも河岸，岬，小島などさまざまな特徴的な地形の地域に存在した。

2)　霊場の巡礼路と地形の関係

三十三あるいは八十八などの寺院で構成される霊場には，その全体に地形的な類似性がみられる。東北地方の奥羽山脈に近い盆地には，とくに多くの観音霊場が分布している（図13）。大師霊場は島や半島などの地形のところに多い。島嶼の多い瀬戸内地方には，多数分布している（図14）。また大師霊場は平野部にもあり，関東平野の中央部にある印西大師講は，河川や湖沼で囲まれた丘陵は島状の景観を呈している（図15）。大師霊場は都市内にもあり，東京の御府内八十八ヶ所霊場は同様に武蔵野台地の末端部に位置している（図16）。

観音霊場は坂東霊場のある関東平野，秩父霊場のある秩父盆地が典型である。観音は滝とかかわるがまた周辺の山岳ともかかわり，札所寺院は平野や盆地の周縁山麓に位置している。そのためこれらの霊場では，遠心的に札所を巡ることになる。観音はそれぞれの土地では外来の神にもあたる。

大師霊場は四国霊場や小豆島霊場が典型である。大師も水とのかかわりがあり，また大師霊場は島や半島を周回する形が多い。そのためこれらの霊場を巡るときには順路は求心的となり，霊場を一巡すると世界を囲い込む形になる。大師は祖先神にもあたり，地元におられる。周回するときには多く山麓にある札所に向けて，すなわち島の内側に向かう。同時に島を周回すれば四囲の東西南北の外界を経て戻るため，輪廻とかかわるように思われる。

このように巡拝路は島，半島，盆地，国，あるいは街道沿いなどに位置し，さまざまなスケールでの地域的まとまり，アイデンティティを示している。霊場の地形の特色をまとめると以下のようである。第１に，環状凹地がある。海岸平野には西国，坂東の観音霊場があり，一方内陸盆地には秩父霊場などがあるが，いずれにも中央の等質な世界の周囲を巡る。第2に線状地がある。中筋や殿様道のように街道にあり，道に沿ってほぼ直線的に発願地から結願地までが配列される。第3に，環状凸地がある。島や・半島には四国霊場などがあり，山間にも篠栗霊場などがあり，中央に山地や丘陵を囲むように巡拝する。

小規模な霊場では街道沿いなどに直線的なものもあるが，発願地と結願地が近いことも多く，この巡廻する形態は輪廻の投影とみられる。ただし四国霊場では，山岳の神のほかに，河川の神，島の神などさまざまな霊地が含まれており，大師はそれらをまとめるコンセプトとして，みることもできる。

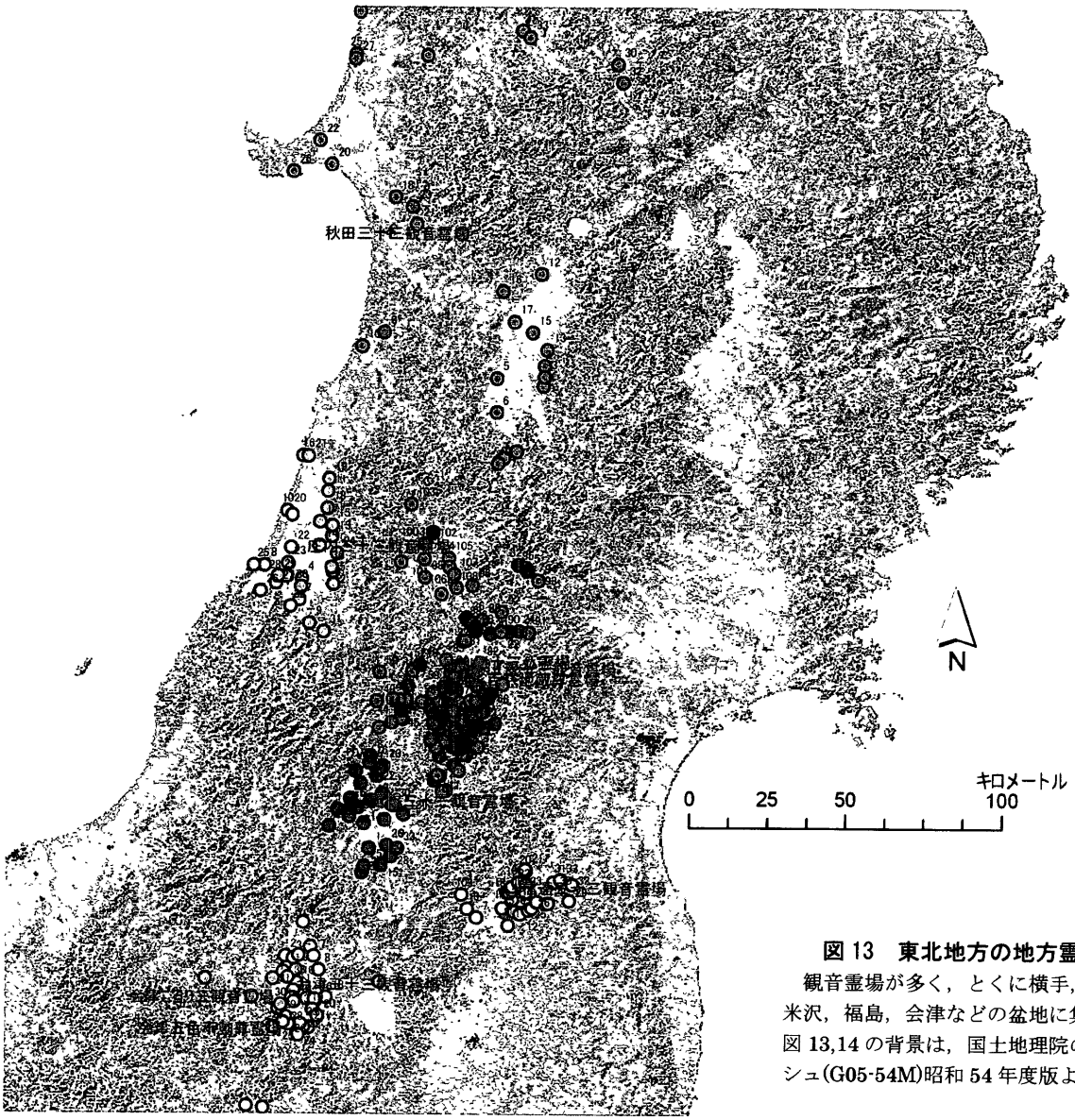


図 13　東北地方の地方霊場の立地

観音霊場が多く，とくに横手，新庄，山形，米沢，福島，会津などの盆地に集中する。なお図 13,14 の背景は，国土地理院の土地分類メッシュ(G05-54M)昭和 54 年度版より作成。

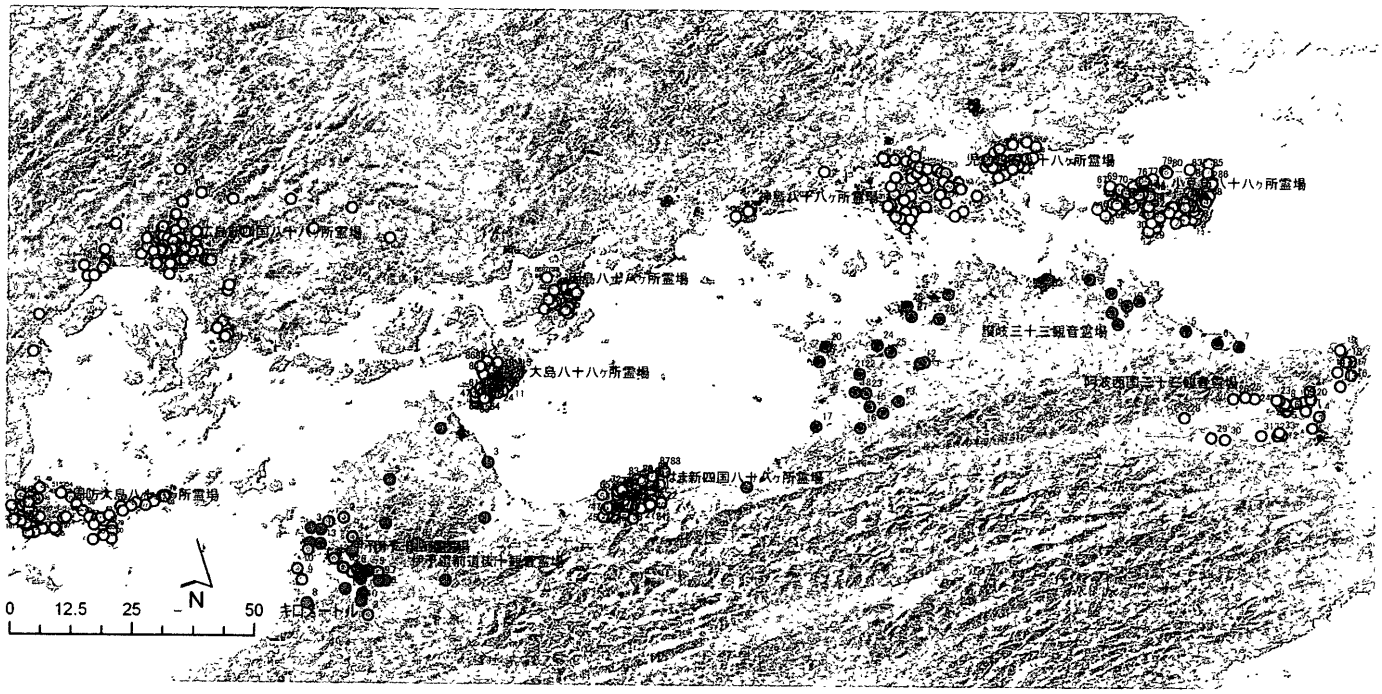
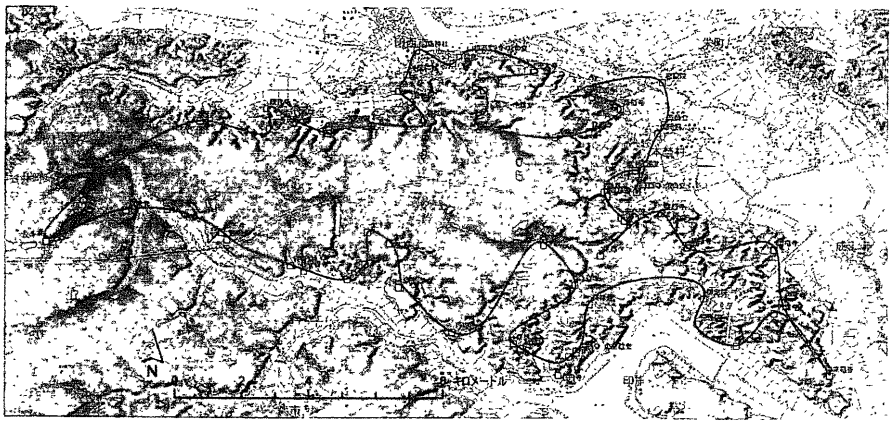


図 14　瀬戸内海周辺の地方霊場　大師霊場が小豆島，因島，伊予大島，周防大島などの島部に集中している。

図 15　印西大師講とその巡拝順序

千葉県印西市，印旛郡印旛村，本埜村，白井町にわたり，北方の手賀沼・利根川と南方の印旛沼に挟まれた丘陵を一巡する。いずれも丘陵の縁辺部に位置している。



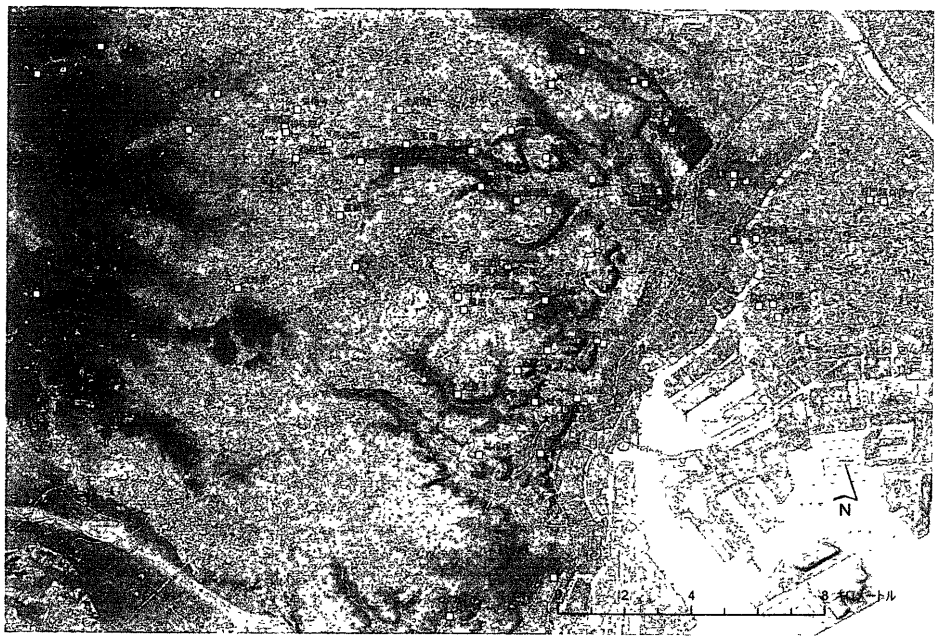


図 16　御府内八十八ヶ所霊場

東京都区部にあり，武蔵野台地を開析する目黒川，渋谷川，神田川とその上流の妙正寺川などの河岸に沿って札所が並ぶ。上野，浅草付近でも隅田川沿岸の微高地上に位置している。

図 17　全国の主要観音霊場

全国にわたり分布する。沿岸部のみならず内陸盆地にも多い。

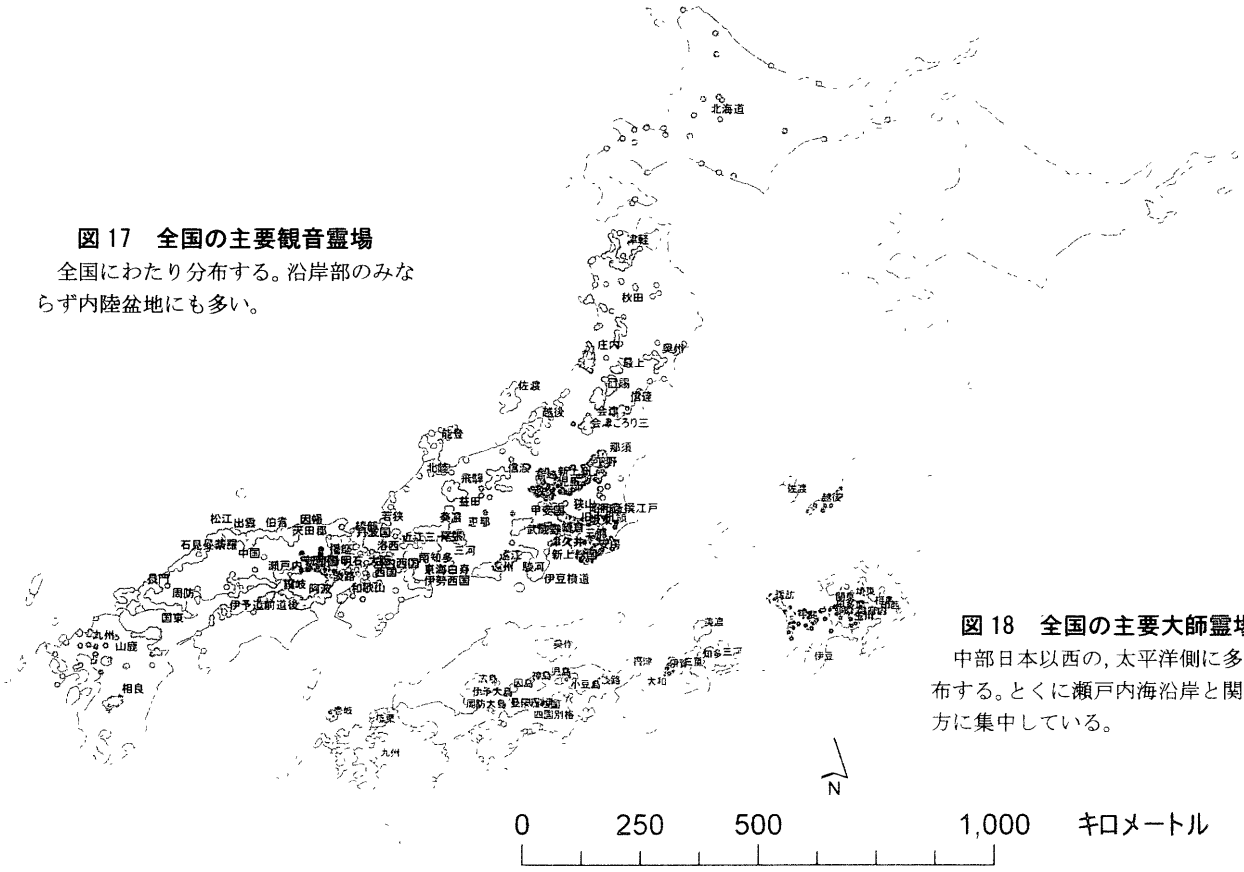


図 18　全国の主要大師霊場

中部日本以西の，太平洋側に多く分布する。とくに瀬戸内海沿岸と関東地方に集中している。

霊場が大衆化したときに多くの人々の現世利益の願いを満たすための多神が求められたと考えられる。

3)　全国分布にみられる霊場群の地域性

東北では三十三観音霊場が古くに開創され，津軽，秋田，奥州，最上，置賜，庄内，信達，会津などの多くの霊場がある。東北と観音の結びつきは強く，特有のものがあり，たとえば野口英世の母シカの手紙にも，会津三観音の一つ中田観音への深い信仰が示されている。同地では仏教としては特異なみかたであるが，真言宗豊山派の恵日寺では磐梯山は山そのものが仏さまであるという（光明，2003）。

関東では山麓部にも秩父霊場規模の観音霊場が分布する（図17）。中部地方の山梨県では，山中湖から大月を経て上野原までの間に，郡内の三十三観音霊場が広がる。ほかにも甲斐三十三観音，府内観音札所がある。甲斐三十三観音は全県に広がる（羽田　一，1976，テレビ山梨，2000）。先述のように観音霊場は盆地状地形とかかわるが，盆地の多い地方には多くの観音霊場が分布する。ただし東海では，海岸付近の平野部にも観音霊場が分布する。

大師霊場は，関東では平野部の各地に地域的にまとまったものが多数分布する。ただし東海では内陸部にも広がり，諏訪，甲斐，美濃にも大師霊場がある。近畿でも，伊賀，大和のように内陸にも四国がある。中国・四国地方には本四国をはじめ（宮崎忍勝・原田是宏，1987），瀬戸内海の島嶼部や沿岸の半島部なとを中心に，多くの島四国がある（図18）。

さらにとくに人口の多い地方では，さまざまな霊場が複合的に存在している。観音・不動・地蔵は，わが国の庶民信仰のレベルでは，父・母・子の関係を理想的な姿で描いた聖家族であったという（山折哲雄，1993）。そのため特定の種類の霊場に限らす，むしろ観音霊場があれば付随的に不動霊場や地蔵霊場も開創され，複合的，重層的なネットワークが地域に展開することが考えられる。

4)　霊場の開創年代と，その種類・規模などの変化

地方の三十三ヶ所霊場は，中世より全国に開創され，近世にその数を増した（表３）。地方の八十八ヶ所霊場は近世以降で，貞享年間に小豆島，正徳年間に甲斐にできたが，大半は化政・天保以降である。真宗の二十四輩霊場は江戸中期の成立という（新城常三，1981）。

表３　観音霊場の成立

～中世まで	10余
～元禄(1704)	28
～享保(1736)	23
～安永(1781)	18
～文政(1830)	23
～明治(1868)	18
不明	35

新城常三(1981)より集計

開創年代別また霊場種類別に霊場の分布を示すと，それらが一様でないことが明らかである。中世には観音霊場のほかにも大師，薬師，地蔵霊場も誕生した。

近世には西南日本を中心に大師霊場が急増した。大師霊場は一国霊場あるいはそれ以下の規模のものが中心で，関東と九州にあるにすぎず，またその時代は新しい。霊場に適切な大きさの島は，瀬戸内海のほかには少ないことによると考えられる。観音霊場は中央日本以北に増え，薬師，地蔵霊場は東国にも誕生した。

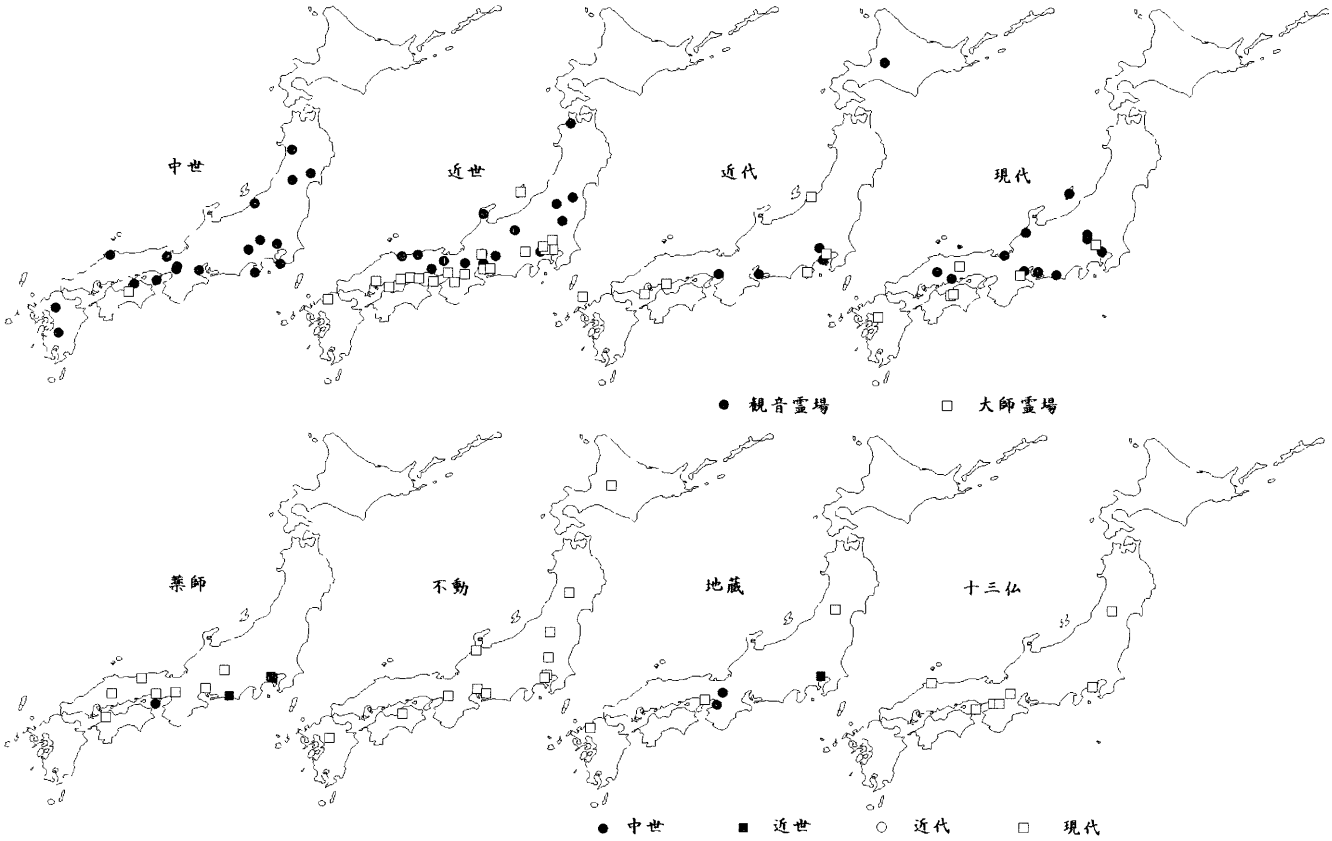


図19　観音霊場と大師霊場の開創年代別分布（上），その他の主要霊場別の開創年代の分布（下）

明治から戦前までの近代以降には観音霊場は全国的に増加したが，大師霊場は中央日本以西で増加している。

戦後である現代には，薬師は近畿地方を中心に，地蔵は新たに全国的に開創された。現代においては，新たに不動霊場が全国的に現れ，十三仏霊場がとくに近畿地方を中心に開創されている。ただし不動霊場，十三仏霊場はみな現代の開創であり，自然的霊場とは性格を異にすると考えられる。すなわち，近代においてすでに観音，大師霊場はある種の飽和状態となり，同一地域に複数の霊場はできないために，新たに不動，十三仏霊場の開創へと変化したと考えられる（図19）。

巡拝路の総延長の長短は，寺院数が多くても局地内であれば短く，少なくても広域であれば長いため，霊場の範囲の大小に相当すると考えられる。霊場を種類別にみるとき，西国，四国，不動霊場がある程度の規模をもち，地蔵，十三仏霊場には大規模なものは少ないことが示される（図20）。ただし観音霊場はその絶対数が他にくらべて多いために，比較的大きな主要霊場だけがリストアップされた可能性がある。また，不動や四国霊場が大きいのは，とくに四国霊場では大師にちなむ真言系寺院を八十八結ぶには，ある程度広い地域を必要とすることが考えられる。

現代の霊場は大規模なものが多く，広域の霊場が開創されてきたことを示す。この広域化は先の多様化とならぶ現代の霊場の特色で，とくに不動，十三仏霊場は新しく登場した広域霊場である。

V　霊場の開創と展開にかんする検討

1)　霊場開創以前の霊地と寺院とのかかわり

巡礼の起源として，唐・宋に渡った僧侶たちが，五台山，峨眉山，補陀羅山や竜門，天台山などの霊地を巡礼し，後に南都の七大寺巡礼，京都の百塔巡礼，比叡山延暦寺の三塔巡礼，京都の七観音寺院の参詣が行われたといわれる（前田 卓，1970）。また，奈良の諸大寺は現在の一般の寺院とは異なり，境内にお墓がなく葬式の導師をつとめず，神像を前に神を祀る儀式がある。そこでは，国家の繁栄，万民の幸福，農作物の豊穣，自然の順調，天皇の安泰，伽藍の護持，仏法の興隆が祈願される（安田映胤，1998）。

西国霊場の起源は中世に求められるが，それ以前にも霊地が存在し，唐からもたらされた巡礼の慣習があった。これが後世の霊場に結びつかないのは，奈良などの大寺院の性格とそぐわぬことによると考えられる。

平安時代に新たに伝来した天台宗と真言宗ともに山上に寺院がある。天台宗は後に南都諸寺などと対立したが，真言宗は南都の伝統的戒律を受け入れるとともに，南都諸寺を密教化した（遠藤諦圓，1998）。真言宗の密教はヒンズー教にはじまり仏教と結びついたが，理性にもとづく仏教に対し，密教では感性の満足を重視する（加藤精一，1998）。ただし天台宗でも密教を含み，寺門の三井寺では顕教，密教，修験の三道融会が重視される（塩入法道，1998）。平安時代には本地垂迹説のもとで，神と仏が一体になった「仏神様」が現れたが，山岳では鞍馬，金比羅，石槌，英彦山，東照などに「権現」が祀られ，平野では稲荷，春日，厳島などに「明神」が祀られた（野見山覚応，2002）。

山地の寺院，密教化の中で，もとより山岳を神体とするような神社との間でも，神仏習合が容易になると考えられる。神仏の調和の中で山林を巡る回峰行が行われるが，厳しい修行であって，一般に広く行われるわけではなかった。また熊野などに詣でる風習はあったが，三十三所の霊場を巡るわけではなかった。

鎌倉時代の仏教では，一つの行や宗を選んで唯一の仏教が主張される。法然は阿弥陀仏を主体として行としての念仏の実践を最も重視し，親鸞は専修念仏を先鋭化させ，道元は只管打座の行に励み，日蓮は題目による唯一の仏教を主張した（林　淳，1998）。しかし伝統的信仰への対応には差異があった。臨済宗では，自らを釈迦と同格の仏と自覚し，悟りは大いなる天地との共感であって森羅万象は仏法の顕現であるとし，生活の隅々までさまざまな守護神を祀り，本尊は教化の方便であって衆生縁により一定ではなかった（沖本克己，1998）。曹洞宗では本尊は釈尊であるが，自己をさしおいて仏道はなく，はじめからおわりまで修行であるとし，修行の基本に黙照禅をおいた（角田泰隆，1998）。

すなわち禅系宗派では自己を重視し，周囲の世界は汎神的に捉えられ，特定の本尊への帰依に必ずしも規定されるもの

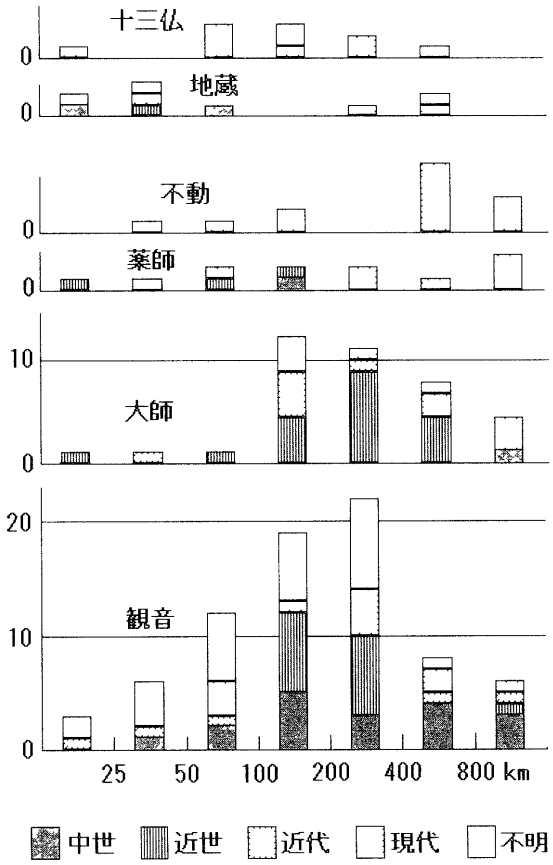


図20　霊場種別の規模と開創年代

でないように思われる。このことは密教にかかわる真言宗・天台宗寺院とならんで，霊場の寺院には曹洞宗・臨済宗寺院が多いことに結びつく。これらの宗派では，本尊を特定の仏に限らないため，古くから岩や滝などの神實が祀られていたのが，さまざまな本尊に形を変えて受容され，後世に伝えられたものと考えられる。

2) 霊場の開創と展開

現在につながる主要霊場は，中世に開創された。それは一方では唯一的な鎌倉仏教が広まる時代てある。その中でも浄土系や日蓮系宗派は，霊場の札所寺院にはほとんど例外的である。霊場に多くまつられる観音はそれらの寺院での本尊ではない。観音などは浄土系・日蓮系宗派とは異なる位置にあり，それらか広まる中で巡礼もまた広まった。古層のさまざまな神々を崇敬するのにも，神そのものは土地に固有でかつ日頃は不在の性格のものであるのに対し，観音や不動のような辺土の仏は像が造立されて霊地に祀られたために，巡拝が容易てあったことも，対象として選ばれた要因と考えられる。さらにそうした身近な神や仏であれば，魂の救済などよりも，五穀豊穣・家内安全・無病息災などの現世利益を祈願しやすいことも，要因の一つと考えられる。

ただし浄土真宗では二十四輩霊場が関東から近江や小倉にも移され，浄土宗でも近畿二十五ヶ霊場が江戸や筑前に移され，日蓮宗でも千ヶ寺詣，百ヶ寺詣，二十一ヶ寺詣がある（新城常三，1981）ように，宗派内での巡礼が行われていた。

近世以降では霊場に遺された納札から，巡礼者の数が推定されている。西国霊場では慶安二年以降では，貞享・元禄（1701-20）に最大のピークがあり，宝暦・明和・安永（1761-80），文化・文政（1801-20）にもピークがある。四国霊場では寛文（1661-80）以降に徐々に増加し，天保（1821-40）にピークに達する（前田 卓，1970）。秩父霊場では寛延三（1750）年の午年には，巡礼者は二月に入ると日に700～900人になったという（新城常三，1981）。近世には中小農民や江戸の市民などが，多数巡礼に出かけるようになった。

また江戸時代には，西国には武蔵，下総，長州，肥前長崎，山城から，四国霊場には，阿波，紀伊，讃岐，備中，摂津から多数がでかけた（前田 卓，1970）。関東からは西国霊場に，関西からは四国霊場へと出かける傾向がみられる。関東から四国まで距離が長いこともあるが，四国霊場が西国霊場より後のもので，影響が西日本に大きいことが考えられる。

3) 現代の霊場

近世に盛んになった巡礼は，現在に続いている。主要霊場について調査されたものては，秩父霊場の巡礼者の数は，昭和50年代には年間１万～２万人てあったのが，50年代後半～60年代前半には2 5万～３万人になり，平成３・４年には４万人に増加した（佐藤久光，1993）。また現在の西国巡礼の出身地は近畿全体では８割以上てあり，四国遍路ではやや広く近畿地方周辺からの遍路が多い（表４）（前田卓，1970）。

表４ 現在の巡礼の出身地

西国巡礼	大阪 32%，	京都 14%，	兵庫 9%
四国遍路	大阪 20%，	愛知 14%，	愛媛 13%

前田 卓，1970

現代ではとくに巡礼をする季節が大きく変化しつつある。とくに四国遍路は春が最多であったのが，その比率が低下した（表５）。四国遍路は春に多い一方て冬には激減しており，四国が南国であるために春に多いという説明に結びつかない。春には大師忌があること，豊作予祝などの農耕儀礼とつながるものと解される。また西国巡礼では春と秋に多かったが，春秋の占める割合は低下している。

表５ 巡礼の季節

	春	夏	秋	冬
西国巡礼	33 1%，	17 8%，	38 7%，	10 4%
四国遍路	63 8%，	11 4%，	21 9%，	2 8%

前田 卓（1970）より

西国巡礼	31 6%，	22 1%，	32 6%，	13 6%
四国遍路	44 6%，	17 1%，	28 5%，	9 6%

佐藤久光（1993）より

これらは，巡礼・遍路はかつて特定の季節に集中していたのが，通年化していることを示している。現代においてとりわけ専業農家が激減し，農閑期とは無縁の人が増えたことが通年化にかかわると考えられる。

Ⅵ おわりに

全国各地に多数の霊地があり，そのネットワークである霊場を，多くの巡礼者が訪ねている。地域によってはさらに，霊場の複合した霊場群というべきものもみられる。本論てはこの霊場を中心にして，まず現在の霊場の実態に関する現地調査結果を，大きく霊場の規模別にまとめた。次に霊地，霊場，霊場群の立地環境と特性および年代による変動について分析した。そして仏教や民間信仰などの時代的変遷が，霊場開創におよぼした影響について推定した。それらの成果は，以下のとおりである。

1) 小規模霊場では，石像が露天にあるいは石龕に納められてまつられるものが多い。それらのネットワークは，線形あるいは円形をするなと，規則的に配列されるようすがみられる。

2) 中規模霊場には，滝なとの修行地の集合したものなどがあり，類似した霊地群あるいは全体がやや等質的な霊域といった特色がある。

3) 大規模霊場では，個性的でかつその地を代表する名刹などが，不連続に結び付けられてネットワークを構成するようすがみられる。

4) 個々の霊地は，山地周辺の傾斜地上部あるいは下部にあることが多い。かつそこには神社が隣接することが多い。

5) 多くの観音霊場の巡礼路は環状を呈し，周辺に向かいつつ巡拝をする特色かある。多くの大師霊場の巡礼路も環状を呈するが，中心に向かいつつ巡拝をする傾向がある。一方形状が直線的なものとして，街道沿いの霊場がある。

6) 東北日本には観音霊場が多く，西日本には大師霊場が多い。観音霊場の形状に適した盆地地形が東北日本に多く，大師霊場の形状に適したなだらかな山地あるいは島などは西南

日本に多いことによると考えられる。

7) 主として中世には観音霊場が，近世には大師霊場が開創された。現代において，薬師，地蔵，不動，十三仏などの霊場が新たに開設され，霊場は多様化また大規模化する傾向がみられる。

8) 神の祀られる場は修行の場でもあり，霊場ともなった。しかし神はときに招いて祀る一方，仏は石像などとして安置される。個々の霊地としてみたときの神は，巡礼する霊場では仏の性格を帯びる。霊場が開創されるとそこには仏教的性格が付与されることとなった。

9) 観音，不動，地蔵，薬師などは真言系寺院のほか，禅系寺院にもまつられた。禅系寺院もこれらの諸仏を否定はせず，開創にあたり伝統的な信仰対象を継承したことが，霊場に禅系寺院も多いことにつながると考えられる。

10) 現代では霊場の性格も変化しているが，とくに巡礼の季節が春・秋に限らず通年化し，またとくに週末に霊場を訪れる人が多いことにあらわれる。この背景には農業人口が激減し，農作業に規制されない人たちの巡礼が増えたことによると考えられる。

本論では主として立地や分布に着目して霊場を分析し，上記のような成果を得た。ただし，霊場を成り立たせる巡礼について間接的にしかふれていない。民間信仰でもさまざまな神送りでは人々が歩き回って神を移動させる。祭りの日には多くの人々の集団により，神輿が渡御し，さらには各地を巡幸する。すなわち神は移動し，神を移動させる人がいる。霊場も季節行事として集団で訪れるが，それは民間信仰や神社祭祀に類似する。霊場はそれらから連続的なものと捉えることができるため，そうした人々の行動の分析が必要である。

たたし，近年増えているように日時を問わない個人的な巡礼であれば，そうした民間行事や祭祀とは異なることになる。また依代に降臨したり，人に憑依したり，ときとして人の前に現れる神であれば，それらを巡礼することもなくなる。また西方浄土の仏であれば，各地を訪ねるまでもなく西方に臨めばよいことになる。そのため霊場・巡礼には，不動の神あるいは地元の仏，その土地に密着した固有の性格を有するものが潜在している。そのため人々の観念の分析もまた必要である。

なお霊場には三十三，八十八などの札所番号がふられている。実際の巡礼は必ずしもこうした順番に規定されるものではなく，開創当時と現在とでは大きく異なると考えられる。こうしたものの実態や，とくに統計に現れにくい零細規模の霊場の調査は今後の課題である。

謝　辞

本研究に際して倶利伽羅，秩父，印西，御府内，坂東，篠島，篠栗の各霊場において調査を行うに当たり，現地の方々より多くのご教示を賜り，また一部の調査には香川大学の稲田道彦教授に同行していたたきました。あわせて感謝申し上げます。

文　献

遠藤諦圓（1998） 律宗．大宝輪閣編集部『日本仏教十三宗－ここが違う』大宝輪閣，25-32p

大路直哉（2001）『日本巡礼ガイドブック』淡交社，270p.

沖本克己（1998） 臨済宗 大宝輪閣編集部『日本仏教十三宗－ここが違う』大宝輪閣，141-157p

加藤精一（1998） 真言宗．大宝輪閣編集部『日本仏教十三宗－ここが違う』大宝輪閣，61-80p.

川田聖見（1980） 長谷寺の歴史と信仰．竹西寛子/川田聖見『古寺巡礼 奈良13 長谷寺』淡交社，78-126.

京田良志（1976）『富山の石造美術』巧玄社，287p.

久世嘉太郎（1998） 倶利伽羅三十三観音．北陸石仏の会研究紀要，2，1-7

光明（2003）『光明』147号.

佐藤久光（1993） 秩父巡礼の動向・推移 密教学，29，19-51

塩入法道（1998） 天台宗．大宝輪閣編集部『日本仏教十三宗－ここが違う』大宝輪閣，33-59p

篠島観光協会（1983）『知多半島 篠島』96p

新城常三（1981） 近世における地方霊場の発達－新西国と新四国－ 民俗学研究所紀要，5，151-179.

大法輪閣編（1997）『全国霊場巡拝事典』大法輪閣，478p

高橋富美雄（2002） 秋田六郡 観音霊場と観音信仰 北方風土，43号，114-140

田上善夫（2003） 北陸および広域における霊場と風祭の分布とのかかわり 富山大学教育学部紀要，57，59-73

田中 博（1983）『巡礼地の世界』古今書院，280p.

角田泰隆（1998） 曹洞宗 大宝輪閣編集部『日本仏教十三宗－ここが違う』大宝輪閣，159-179p.

テレビ山梨（2000）『甲斐百八霊場』テレビ山梨，348p.

豊島和子（1995） 篠栗四国八十八ヵ所霊場－地方霊場の発展をめくる－考察－（上） 関西外語大学研究論集，62，393-407

豊島和子（1996） 篠栗四国八十八ヵ所霊場－地方霊場の発展をめくる－考察－（下）．関西外語大学研究論集，64，449-463.

中根富三郎（2001）『南知多町内地蔵巡り案内』33p

野見山覚応（2002）『南蔵院らの霊場破壊と最高裁判決』29葉 （初版1987）

羽田 一（1976）『郡内三十三番観音霊場巡礼記』私家版，177p

林 淳（1998） 浄土宗 大宝輪閣編集部『日本仏教十三宗－ここが違う』大宝輪閣，81-97p

前田 卓（1970）『巡礼の社会学』関西大学経済・政治研究所，276p

南知多三十三観音霊場会（1982）『南知多三十三観音めぐり』創夢社，104p.

宮崎忍勝・原田是宏（1987）『四国八十八所遍路 愛媛・香川編』朱鷺書房，192p.

山折哲雄（1993）『仏教民俗学』講談社，342p